ZEQU
表紙／龍炎狼牙
二次元ぷち文庫
2D PETIT POCKET NOVELS
TS少女
精霊機士
ハルキ
第3話
試し読み版

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

TS少女
精霊機士
せいれいきし
ハルキ
第3話
ZEQU
表紙／龍炎狼牙
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

一ノ瀬春樹（いちのせはるき）
ＴＳ病にかかり、女体化してしまった少年。男の身体に戻る手段を探そうとするのだが……!?
十野真琴（たりのまこと）
晴樹の幼馴染みの少女。晴樹よりも学年が一つ下で、彼を「お兄ちゃん」と呼んでいる。
七山茜（ななやまあかね）
一年前にＴＳ病で女体化した春樹の先輩。クールでミステリアスな雰囲気をまとっている。

第3話　暮色蒼然（ボショクソウゼン）　精霊機士に迫る淫影

「ひぐっ！　やめ……ろっ！　それ以上は、それ以上奥は、やめ……て、くれぇっ！」

精霊機士に変身した状態でスライムに囚われたハルキへの陵辱は、終わらない。

まだ他者以前に自分の指先の感触も知らない秘唇の隙間から流れ込んだ半ゼリー状の物体は、ヒンヤリ……とした冷気を染み込ませてくる。

「ひぅっ！　うくっ！　う……ううっ！」

身体の芯に氷でも挿し込まれたような冷たさに一瞬身を固くするが、その後には、ハルキの体温を吸収したスライムが膣壁に広がっていくのが分かる。

だが、ソレだけでは、なかった。

「うくぅっ!!?」

どこまでも広がりを見せるような異物感が不意に、キュッ！　とすぼまった感触にブチ当たり、その侵攻が遮られる。

「ソ……ソコ、は……」

ノドの奥で詰まったような声をこぼすハルキ。

昨日女のコになったばかりのハルキでも、その感触の正体は容易に想像ができた。

えっちシーン試し読み
ここからスタート！

（し、処女膜？　オレ……処女膜がある？　しかも……）
しかも今、その純潔をワケも分からないバケモノに捧げようとしているのだ。
「ひっ！　くっ！　や、やめろやめろやめろっ!!　今すぐ、オレから出ていけぇっ！」
処女を奪われる恐怖以上に、男の自分がそうなろうとしている。
想像しただけでも背中に怖気が走る状況に直面した上、その渦中にいるハルキは、バタバタと手足を乱暴に振るわせるが、所詮は無駄だ。
「はきゅぅっ!!」
今や〝彼女〟としか言えないハルキの乳房やフトモモに螺旋を描き絡みつくスライムの粘り気が、ゾワゾワ……とした余韻を残す微熱のような快感を促してくる。
「やめ……うくっ！　さわる、なっ！　オレに、さわるんじゃ……はきゅっ！」
気がつけば拒絶の言葉にも色が滲み出す。
そうしている間にも、内蓋で覆われたハルキの膣壺を満たし始める。
「や……めっ！　でてい……けっ！　オレの中、ヤバ……いっ！　ミチミチいってヤバいからっ！　それ以上！　入ってこられたら……うぐぐぐっ！」
まるで脆い風船を引き延ばされるような感触が中へ中へと入ってくる。
「ひっ！　いや、だっ！　やめ……ろっ！　本当に、やめ……て……く……れっ！」
おおよそ、男として一生を送っていたのならば、経験することもない体内を犯される恐怖。

「入ってきて……やぶけ……るっ！　本当にやぶけるっ!!」
そう叫んだ直後。
最初に聞こえたのは、プツリ……ッと細い糸が切れるかのような音だった。
「ふっ！　きゅっ!!?」
文字通り、針を通すような穴だった。
だがしかし次の瞬間には、その極小の点は波紋のように広がり、弾ける。
「ふくぅうううううううううううううっ!!」
刹那に上がったのは、ハルキがコレまでも、そしてこれ以降も二度と体験することのない痛みだった。
「やぶけ……て、るっ！　オレのアソコ……〝初めて〟がやぶけて……うくぅぅっ！　こ、こんなことって……うくぅ」
ソレは言葉にできない喪失感だった。
その虚(ウロ)を鉄サビの香りが満たし、思考が一瞬赤黒く染まる。
「やめ……ぬい……て……。いた……い……ひぐっ！　こんな、こんなこと……」
女になったとしても、そんな体験するハズはないと思っていた。
しかし実際に体験してみると、痛みの後に更に入り込んでくる挿入感の方が絶大だった。
「うぐっ！　ううっ！　ううくうううっ!!　奥っ！　オレの奥に、オレのオマ〇コの奥ま

で入ってきて……あくくううぅつっ!!」
痛みを塗り潰し、押し潰してくる圧迫感と窮屈感が一気に膣壁を押し広げ、昇ってくる。
「くるし……い……はうぅくっ！　オレの中、オマ〇コの中にドンドンドンドン入ってくるっ！　スライムチンポ、入ってきて……ああっ！」
自分以外の異物に。
しかもバケモノに、体内を占領され、支配されている。
「いやだ。こんなの……女って、女のコって、こんなの……なのか？　こんなの……って」
おかしくなる。
そう思ったが、〝そう〟なるのは、まだまだコレから、だった。
「ひゃぅんっ!!」
不意にハルキの声が跳ね、その肢体が躍る。
「ふぅっ!!　ふきゅっ！　んんんくぅうんんっ!!　な、なんだ？　いま、の？」
おおよそ理解できない感触だった。
スライムの触腕が挿入されたヴァギナの奥から、コレまでにない刺激が這い上がってきたのだ。
「な……なんだ？　はぅっ！　くきゅぅん！　奥、奥を突いてきて……る？　クニクニって、突いてきて……そ、そこ……んんっ！」

くすぐったい。
それ以上に、モゾモゾ……とした刺激が、肉壺の最奥に食い込んできている。
「なにを……はぅっ！　何をして……るん、だ？　はきゅっ!!　そんな所、刺激されたら……あぁぅんっ！」
切なくて、声が漏れ出てしまう。
合わせるように、ジュワリ……ッと湯気が出るほど熱い愛液が滲み出してくる。
「なに……なんで？　そんな所ばかり……ふやっ、ふやややや……っ！」
声を発している自分でも恥ずかしくて、首元までカッカッとしてくるほどの甘い嬌声をこぼしながら、ハルキはその刺激の根源を探ってみる。
（うくぅ……なんだコイツ？　オマ〇コの奥、子宮の入り口？　プニプニした所ばかり、つついて……くぅっ！　コンコンしてきてる？　一体なにを……？）
理解はできない。
いや、そんなモノなど必要ないだろうとスライムはハルキのソコへ。
子宮口の周りに刺激は染み込み続ける。
「ふ、にゅっ!?　んんんっ!?　ふや？　やぅっ！　うぅっ!?　な、なんだ、コレ？」
そして、リズミカルな刺激が身体の芯までくすぐり始めた瞬間、だった。
「はきゅぅううんんんっ!!?」

何の前触れもなく、ハルキが目を見開き今までにない嬌声を上げる。
同時に秘唇の隙間からはピュピュッ！　と音を立てて愛液が飛び出す始末だ。
「くひぃっ！　ん、きゅっ！　ふ、あっ⁉　な……んだ……ああ、これ、これってなんだあっ！　はぅぅっ！」
血流に乗って駆け巡り、瞼の裏で火花のように散る快感を声を押し殺して抑え込む。が、無駄だ。
「ふくっ！　ふぁっ♪　んっ、ふっ！　な、なんでっ⁉　なんでこんな感じて……あ、ああぅっ！」
小刻みな呼気がそのまま喘ぎ声に。
切ないメスの声になってしまう。
「女のコって、くひっ！　女のコってこんなに……っ……はっぅううっ！　女のコの快感ってこんなひっ？　こんなに感じるもの……なのかぁあっぅんっ♪」
おおよそ、男の時には感じたことのない快感だった。
絶頂の瞬間に射精管を駆け上ってくるあの、ゾクゾクとした感触。
ソレが今、脊柱の短い範囲でピストン運動しているのだ。
「はきゅっ！　や、めっ！　ヤバ……いっ！　コレ、ヤバッ！　気持ち、いいっ‼　スライムチンポにオマ〇コ、コンコンッってされて感じて……ふぃっ！　くぅんきゅっ！　こ

んなに、感じるなん……へっ！」

例えるならばソレは、解放感のない射精に似ていた。

「はぅっ！　くうっ！　イクッ！　オレ、女のコでっ！　ひゃぅうっ！　女のコの身体でイくぅうんんっ‼」

まるで無数のゴムボールが、背筋に沿って昇ってくるような。

同時にその数に限りなど、ないような連続的な絶頂だった。

「ふきゅぅっ！　変にっ！　変になるっ！　こんなの、いっぺんに来られたら、オレ、変になるうぅっ……」

ガックンガックン、とまるで壊れたバネ人形のように身体を震わせ、アクメの波を彼方に押しやろうとするが、無駄だった。

「はぅうぅっ！　や、くぅっ！　震え、へっ♪　ブルブルプルプル、スライム擦れて、気持ちいいのがとまなひぃいっ‼」

暴れた拍子に肌を撫でてきたスライムの拘束部に刺激されただけでも、軽いアクメを迎えてしまう。

「なんでっ！　はぅっ！　うくぅっ！　なんで、こんなに感じ、てっ‼」

少女は知らないだろうが、先ほどから今に至るまで、舐るような刺激で彼女を拘束しているスライムが子宮口の付近を執拗に刺激し続けているのには、意味がある。

つまりはポルチオ性感帯。
数あるメスの性感帯の中で、最も敏感な箇所にタップリと快感を注がれたハルキの肢体はまさに、全身性感帯と化していた。
「はにゅっ！　胸っ、オッパイ……揉まれただけで、くるっ！　くりゅぅっ!!」
露わになったたわわな乳房をまさぐられただけで、その先端から波紋のような喜悦が広がり四肢の隅々まで反響しまくる。
「ふぃっ！　ふっ……くぅ……あ、ら……め……ぇ……え……女のコの気持ち、いいの、ヤバ……いひぃん♪　オレ、おかし……くなりゅぅ……ううっ」
ヘタをすれば、色に染まった声でノドを振るわせるだけで、軽くイってしまう。
そして、まだ止まぬ喜悦の波底に、ハルキが心身共に沈みそうになった時だった。
「はきゅぅんっ!?」
不意に感じた新たな刺激に、崩れてトロけかけていたハルキの身体がビクンッ！　と震える。
今の今、子宮口のフチに注がれるモノとは別の。
秘唇よりも下のすぼまった穴に、ブニュリ……ッとした刺激が押しつけられたからだ。
「お……おま、お前、な……何を？」
生憎、言葉は通じない。

それ以前に、聞かなくても分かりきっていることだ。
しかし、聞かずにはいられなかった。
「な、なに、尻……オシリの穴に、押しつけてる？　うくっ！　そ、そこは……ちがうっ」
そう言って、キュッキュッ、と音が出るほどシリ穴をすぼめる。
しかし元々定まった形を持たない相手にとって、そんな行為自体、障害にすらならない。
「ふきゅぅっ！　うくぅっ！　流れて……く、る？　オレの中、今度はオシリ……にっ！　ううっ……オシリにチョロチョロ流れ込んできて……あ、あああっ！」
すぼまったシワの隙間から注がれる無数の糸のような感触が、直腸と言う名の溜まり場で集まり、形を持ち始める。
「ひ……うっ！　うくっ！　ま、まさか……ウソ、だろ？　な、なあってっ！」
先ほどまで艶に濡れていたノドから込み上がるのは、引きつった声だ。
しかし相手は、答えない。
そのことが逆にハルキの恐怖を煽り、同時に自分のアナルで構成されたモノの形を敏感に察知してしまう。
「ひっ、うっ！」
太く、硬く、カリ首を備えたその感触にシリ穴を押し広げられ、一気にハルキの顔が青ざめる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/